

「英語での発信」は誰に不利益をもたらすか

—「孵卵器」としての日本語論文—

佐藤 章

かりとなる。

このモデルにおいて、研究者は、先端的、専門的な内容は英語で、他方、それほど難解ではなく、非専門家の知的欲求に答える内容は日本語で、それぞれ執筆・報告している。日英二つの言語は、異なるコミュニケーション圏（想定読者・聴衆）と、その圏域に適した異なる表現様式（話題、内容の難易度、語り口）に対応した分業関係にあることになる。すなわち、これら二言語の関係は対等ではなく、学術知識の専門性という尺度に照らせば、英語が主で、日本語が従となる。

対等な関係にない複数言語の併用を指す、社会言語学上の概念として「ダイグロシア」(diglossia)があるが（学校など公共の場では標準語・公用語を使うが、家庭では方言や民族語を使うというのが典型例）、昆虫学者の彼に見られるような理系研究者のモデルはこれに酷似している。

広く日本の理系研究者が、このような研究言語における「ダイグロシア」状況に置かれていることはよく知られている。「インパクト・ファクター」の算出で有名なトムソン・サイエンティフィック

●日本アフリカ学会

世界の特定の地域名を冠した学会が日本に数ある中で、日本アフリカ学会は、アフリカを共通のフィールドとするさまざまな分野の研究者が、文系、理系の垣根を越えて交流し合うところに特徴がある。この文理共属ぶりを堪能できるのが、毎年五月に開催される学術大会である。

口頭発表は三会場制で行われるが、直近の選挙結果に関する政治学の報告や数式を駆使した経済分析がなされる会場の隣では、マウンテンゴリラの生態や新種の昆虫に関する報告がなされていたりする。政治研究が専門の筆者は、本来は政治関連の会場に行くべきかと思いつつも、同じ分野なら論文でも読む機会があるだろうからと自分に口実を言い、日頃触れることのできない理系の報告を聴きに

行くのが大好きである。新たな症例の記載、古人類化石の発見、火山の動向、気候変動の影響、等々、理系研究者たちの報告は、文系研究者にとって未知の知識の興味深さはもちろん、アフリカを舞台にして展開される研究活動の幅広さと奥深さ、そして分野は違えども研究というもののすばらしさを教えてくれる。

親しくさせていただいている応用昆虫学の専門家によれば（彼はアフリカの在来農業に見られる混作農法の持つ害虫抑制効果の検証に取り組んでいる）、たいいての理系の研究者は、自分が行っている中心となる研究成果は海外の学会や英文ジャーナルで発表するのが標準であり、業績評価でも英語のものが重視されるから、日本の学会での報告は業績という面ではほとんど意義がないのだ、と言う。

●二言語併用とダイグロシア

にもかかわらず、日本アフリカ学会での報告は楽しみだと彼は言う。なぜかといえば、自分の分野の専門家ではない聴衆を相手に、自分の研究のエッセンスをわかりやすく、興味深く伝えることが面白いからだ、と。研究者自らがわかりやすく語る最先端の研究成果——道理で興味深い報告をたくさん聴かせて頂けるわけである。

昆虫学者の彼に代表される理系研究者たちが、英語圏と日本語圏をまたにかけて実践している執筆・報告の仕方は、研究者が日英の二言語を併用する際の一つのモデルを提示してくれる。このモデルは、近年、日本の人文・社会科学に対しても叫ばれるようになってきた「英語での発信」をめぐる問題を考えるうえで、格好の手が

(ISI)社のデータベース(大半を占めるのは理系の文献である)に基づいて国立情報学研究所が推計したところでは、日本の研究者が生産した「国際的に流通している学術論文」(定義の詳細は明らかでない)の約八〇%が海外の学術雑誌(大半が英語)に掲載されているとされる。いわゆる「論文の海外流出」状況である(この点に関する詳細は、科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会『学術情報基盤の今後の在り方について(報告)』(二〇〇六年三月二三日)の第三部、ならびに『情報管理』第四九巻第一〇号(二〇〇七年)掲載の根岸正光氏による同報告の紹介を参照)。

● 不利益を被るのは誰か

地域研究を含む日本の社会科学の世界では、伝統的に、理系と比べて英語での論文・学術報告ははるかに少ない。この現状を踏まえ、国際的な学術コミュニティとの研究交流の促進や、日本での研究の国際的な認知度の向上をねらいとして、「英語での発信」を推進しようとする考え方が近年高まりを見せている。その背景には、多額

の公的資金を投入する学術研究の費用対効果を測定する尺度として、国際的な評価が注目され始めていることもある。

言うまでもなく、社会科学に向けられた「英語での発信」という圧力は、研究者が執筆するさまざまなタイプの書き物のうち、随筆や短文に向けられているわけでは到底ない。推奨されているのは、研究活動の中心部分を占める、専門的研究者を相手にした学術論文、モノグラフ、学会報告の英語化である。したがって、仮に日本の社会科学が学界を挙げて、「英語での発信」に乗り出していった場合、その先にあるのは、日本の理系研究者が置かれているのと同様の、執筆言語の「ダイグロシア」と「論文の海外流出」ということになる想定される。

実際のところ、日本の社会科学がこのような状態に立ち至るまで何年(あるいは何十年)かかるのかは不明ではあるが、ここで先取りして考えてみたいのは、この「あり得るシナリオ」が現実のものとなった場合に、誰が不利益を被るのかである。筆者の考えるところそれは、研究者志望だが、専門論文を読みこなす十分な英語の読解

力をまだ習得していない大学の学部生から修士課程にかけての層ではないだろうか。

彼ら/彼女らは、指導教官から、外国の研究水準に追いつけ追い越せと、英語論文を食欲に消化するよう日々厳しい指導を受けているはずだが、はじめて目にする用語や分析概念、発音すらおぼつかない人名、地名、組織略号など多数の英文固有名詞(とりわけ地域研究の論文にはつきものである)に難渋することがしばしばである。地域研究の場合、非英語圏を調査地に選択した学生は、できるだけ早くフィールド調査を実現するために現地語の習得にも多くの時間を割かねばならない。日本語で書かれた専門的論文は、これら若手に大きな便益をもたらすはずである。

● 日本語論文の便益

若手が得る便益とは具体的にはどのようなものであるうか。筆者の体験を紹介してみたい。昨年筆者は、早稲田大学大学院社会科学部で「アフリカ研究」という半期の科目を担当する機会を持った。せっかくの大学院の授業なので事情講義だけでもったいない

と考え、第一線の研究者が取り組んでいる研究課題、研究の水準、論文執筆の作法を感得してもらうこともねらって、最新の学術論文を輪読する形式の授業とした。

授業の構想を練る際に悩んだのは、英語論文を取り入れるかどうかだった。可能な限り学生の関心に沿った文献を選ぶため、指定論文の選定は、初回講義で学生にヒアリングしてからと考えていたが、この科目は、「社会科学」という間口の広い学科での、専門分野に特定のない「アフリカ研究」という授業である。学生の関心は多岐にわたることが予想された。

日本語の論文は数多く発表されているが、院生レベルの知的欲求に答えつつ、過度に専門的ではない、授業に適した論文がいくらかもあるというわけにはいかない。英語論文も含めれば、英語圏での分厚い研究蓄積を頼りにできるわけであるから、学生の多岐にわたる関心に臨機応変に対応できることは確実だった。他方で、英語がハードルになって、内容の理解が不十分なまま授業に臨むような学生が増えれば、ディスカッションが成り立たない懸念があった。悩んだ末、シラバスには「文献は日

本語のみ」と記した。

予想どおり学生の関心は、紛争、民族、開発、ガバナンス、教育と幅広く、アフリカ以外の地域が専門の者も過半数を占めたが、学生全員にそれぞれの関心に沿った日本語の論文を割り当てることのできた。学生はきちんと論文を読んだ、内容を理解し、活発なディスカッションが行われる実り多い授業となった。

日本語論文限定としたことについて、講義終了後に学生に意見を求めたところ、次のような回答が寄せられた。

① 日本語論文は辞書を引かずに済むので読む場所を選ばない(電車の中や授業の合間でも勉強可)。

② 通読に要する時間が少なく、済むため、英語論文を一回読む時間で複数回読め、理解を深められる。

③ 十分な勉強時間が取れないときでも(とかく学生は忙しい)、流し読みで関心があるところを探し当て、そこを集中的に読むというやり方で、授業に臨む最低限の準備ができる。

④ 英文読解に関する質問でデ

スカッション時間がとられるのはもったいないが、日本語文献の場合はその心配がない。

⑤ 自分の専門ではない分野でも、だいたいのところはわかる。

学生の意見でとくに指摘されていることは、日本語論文が時間管理の面できわめて高い効率性を持つということである(①~④)。

場所を選ばず、細切れの時間も利用でき、時間があるときはじっくり、ないときには便宜的にと、柔軟な読み方ができる。さらに学生は講義時間の有効活用という点も意識していた。また、専門外のことを学ぶ上でもハードルが低いというコメントは見逃せない(⑤)。

学際的素養が推奨される地域研究にとつては、この点は日本語文献の重要な利点になると考えられる。ちなみに、英語論文を選ばなかったことへの苦情は一つもなかった。

いほうが望ましいことも言うまでもない。読解力の向上のためにも継続的に英語論文を読んでいくことは必要不可欠である。

それを認めた上でもなお、読解しやすい日本語で書かれた最先端の専門的論文が豊富であるほど望ましいことは否定されないだろう。院生レベルの学習には非専門家向けの文献では不足だが、かといっていきなり最先端の内容の英語論文では歯ごたえがありすぎる。慣れ親しんだ日本語は、耳慣れない固有名詞を記憶し、新しい概念を取り入れるハードルを下げてくれるし、時間と場所に照らして効率的でもある。日本語で書かれた専門的論文は、研究生生活の入り口に立った初学者たちにとって「インキュベーター」(孵卵器)としての重要な機能を果たしているというのが、筆者が体験から得た実感である。

筆者自身は「英語での発信」が、時代の要請であることを自覚しており、そのこと自体には反対ではない。しかし、日本で研究する専門家が研究の中心となる業績を英語でのみ発表するようになり、その結果として日本語の専門的論文が先細りしていくことになれば、

●「孵卵器」としての日本語論文

「孵卵器」もまた喪失されるのではないかと危惧する。「英語での発信」が、若手を含めた日本国内での研究者の再生産システムへの影響を与えかねないことは十分に意識されているだろうか。すでに専門家として独り立ちした研究者が、国際的に編成されたコアな学術コミュニティに強い帰属意識を持って、英語化に積極的に応じていくのは一つの判断である。しかし、そこで放置される格好となる若手層に対して、代わりとなる「孵卵器」を用意せぬまま、「英語論文ぐらい読めて当たり前」程度のことしか言えないのだとしたら、無責任のそしりはまぬがれない。

(さとう あきら／アジア経済研究所アフリカ研究グループ)

研究者を目指す以上、遅かれ早かれ、英語で書かれた分厚い研究蓄積に取り組んでいかなければならないし、そのために必要な読解力を身につけるのできるだけ早

力をつけるのできるだけ早